

### 三 播磨はりまの守護しゆご赤松氏あかまつし

#### (一) 赤松則村のりむらの活躍かつやく

後醍醐天皇ごだいごと則村

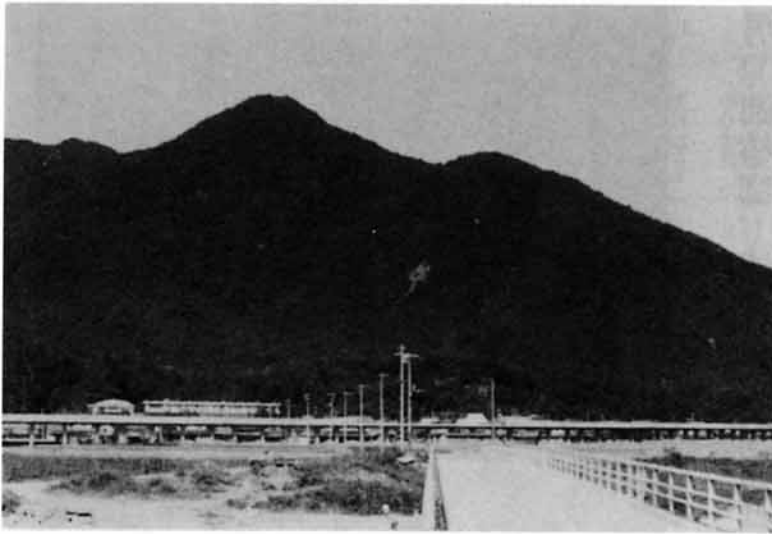
後醍醐天皇は、二度も鎌倉幕府かまくらばくふを倒す計画を立てまし

たが、そのどちらにも幕府方にもれてしまいました。一三三一年（元弘元年）八月、二度目の討幕計画とうばくけいがもたれたとき、天皇はとらえられ、翌年よくねんに姫路を通つて美作みまさかへぬけ、隠岐おきの島へと流されました。

後醍醐天皇の皇子おうじ、護良親王もりながしんのうは、その年の十一月に吉野よしので兵を挙げました。

親王の命めいを受けて、いちばん初めに立ち上がったのが、赤松則村でした。

赤松氏は、佐用荘さようしやう内の赤松村に住んでいたのです、その村の名を名乗りました。が、鎌倉時代には、代々佐用荘の地頭じとうの職についていました。



苔 縄 城 跡

赤松則村は、上郡町の苔縄城こけなわを本拠ほんきよとして兵を集め、一三三三年二月、京都に向かつて進軍しました。その途中とちゆう、現在の姫路城のある姫山とろでに砦とりでを築き、幕

府方の西国の兵が後ろからおそつて来るのに備えました。赤松軍は、摩耶山まやなどで幕府軍をさんざんにうち破り、京都に迫せまりました。そして、ついに六波羅探題攻撃はらたんだいこうげきの先頭を切り、諸国の討幕軍を勇気づけるとともに、足利尊氏あしかがたかうじらと六波羅軍をうち破りました。

則村が兵を挙げたのは、にわかと思いつきではありませんでした。則村の姉の子しゆうほうみょうちゆうに宗峰妙超だいてうこくし（大燈国師）とい



大 燈 国 師

うりっぱな僧がおりました。妙超は京都にいて、討幕計画の仲間の一人でもあったのです。ある時、討幕計画の席に則村が招かれましたが、「時いまだいたらず」といつてその場を立ち去ったといわれています。

また、則村は護良親王と早くから連絡をとっていました。則村の

三男、則祐のりすけは、護良親王の側近として、行動をともにしていたので、則村は天  
皇方の情報を早くから手に入れることができました。赤松氏は、地方の一地頭  
から大きな領主へ飛躍ひやくしたいという、まえまえからの希望を実現するために、

その機会を待っていました。

赤松則村が兵を挙げた直後に、後醍醐天皇は隠岐の島を脱出だつしゅつしました。そして、京都を取り返した知らせを受け取った天皇は、京都へ向かいました。その途中、播磨に入った天皇は、書写山円教寺・増位山随願寺ずいがんじなどにたちよった後、



赤松円心（則村）

兵庫の福巖寺ふくこんじに入りました。ここで、赤松則村・則祐父子は天皇に会うことができ、天皇からおほめの言葉をもらいました。

その後、楠木正成くすのきまさとしげらと天皇を守って西宮に着いたころ、鎌倉が新田義貞にったよしただによつて攻め落せとされた知らせが入りました。

鎌倉幕府が滅びほろ、建武の新政けんむ しんせいが成立した後、討幕に手柄のあった武士たちにほうびがさずけられました。そのうち、六波羅探題攻撃の一番手として活躍した赤松則村は、播磨の国の守護と佐用荘の地頭に任命されました。

しかし、建武の新政に手柄のあった新田義貞は、自分が播磨の守護に任命されるように天皇に働きかけたので、則村は播磨の守護をとかれてしまいました。則村は、そのころ京都にいましたが、その仕打ちに腹を立て、自分の領地、播磨の赤松に帰ってしまいました。

足利尊氏と則村　そのころ、京都や朝廷で「尊氏なし」という言葉がはやっていました。それは、鎌倉幕府を倒すのにたいへん力をつくした足利尊氏が、新しい朝廷の重要な役に加えられていないという意味でした。



赤松則村の廟（法雲寺境内）

ところが、一方、尊氏は六波羅探題を攻め落とすと、そこをそのまま自分個人の奉行所として、戦いに加わった武士たちの手柄を報告させて、恩賞を与え、武士たちを味方にひき入れる体制をとっていました。

一三三五年（建武二年）七月、

北条高時の子、時行が信濃（長

野県）で兵を挙げたとの知らせが、天下を驚かせました。北条氏が再興をくわだてたのです。尊氏の弟、直義が鎌倉にいて時行と戦いましたが、負けてしまいました。鎌倉は、また北条氏の手にわたってしまいました。

そこで尊氏は、天皇の命令がないのにもかかわらず、勝手に鎌倉に向けて進軍し、むかえ討つ時行の軍をうち破り、たちまち鎌倉を取り返してしまいました。

足利尊氏は、赤松則村の持っている力と、新しい朝廷に対する不満とをよく知っていました。尊氏は、鎌倉を取り返すために京都を出発する時、佐用荘の則村に使者を送って、息子一人の参戦を求めました。則村は、これにこたえて、二男の貞範さだのりしゅつじんを出陣させました。

北条時行を破った尊氏は、新田義貞を除くことを口実にして、はっきりと朝廷に反抗はんこうしました。朝廷は、尊氏を討つために、新田義貞を東にさしむけました。尊氏は箱根の竹の下の戦いで義貞軍をうち破り、敗走はいそうさせました。この戦いで赤松貞範は大きな手柄をたて、そのほうびとして丹波たんばの春日部荘かすがべしやうを尊氏からもらいました。

尊氏は、敗走する義貞軍を追って京都に迫りました。この時、赤松則村は長男の範資のりすけを出陣させ、赤松勢が先頭となって朝廷の軍を破ったので、尊氏は京都を占領せんりょうすることができました。

ところが、奥州おうしゅうにいた北畠きたばたけ顕家あきいえが強い軍を率ひきいて京都にやって来ました。

顕家は、新田義貞・楠木正成・名和長年なわながとしらと力を合わせて、尊氏をうち破ってしまいました。尊氏は丹波に落ちのび、それから兵庫にいた赤松則村にむかえられました。則村の助けを得た尊氏は、再び京都に攻め上りました。しかし、途中、楠木正成や新田義貞と戦い、いずれも合戦かっせんに敗れやぶ、兵庫から海路をとって九州へのがれました。

赤松則村は、播磨あこうにいて、尊氏の軍が九州から攻め上って来るまで持ちこたえるための城を、赤穂郡上郡町赤松あこうぐんかみごおりの白旗山しろはたやまに築つくきました。

天皇から尊氏を討つように命じられた新田義貞は、大軍を率いて西に下り、





白 旗 城 跡

則村との間に戦いを始めました。白旗城は高くけわしく、また谷間もせまく、人も馬も思うように活動できません。

義貞は五十日も白旗城を攻めましたが、落とすことができず、大事な日をむだに過ごすばかりでした。

そのうちに尊氏の軍が勢力をとりもどし、九州から陸と海の両方に分かれて攻め上って来たので、義貞は城の囲<sup>かこ</sup>みをといて、京都に引きあげて行きました。

一三三六年（延元<sup>えんげん</sup>三年）五月、尊氏



神戸の湊川神社（楠木正成を祭る）

の軍は、神戸の湊川の戦いで  
楠木正成の軍を全滅させ、一  
挙に京都へなだれこみました。  
一三三六年十二月、京都に  
とらわれていた後醍醐天皇は、  
大和（奈良県）の吉野に移り、  
建武の新政は、わずか二年で  
終わりました。  
一三三八年（暦応元年）、  
尊氏は、義貞をうち破り、征  
夷大將軍として正式に室町  
幕府を開きました。

室町時代になってからも、赤松氏の活躍はめざましく、則村の子、則祐の代には、四職ししきといって山名氏・京極氏きょくごく・一色氏いっしきとともに幕府の重要な役に任命される四家しけのうちの一家となりました。また、赤松氏一族は、播磨・摂津せつづ・備前ぜん・美作みまさかの守護となり、大きな勢力を持つことになりました。